

母子歯科保健管理に関する研究

分担研究者 井上 直彦（東京大学分院歯科口腔外科）

共同研究者 伊藤 学而（鹿児島大学矯正科），井上 昌一（鹿児島大学予防歯科）

亀谷 哲也（岩手医科大学矯正科），金田一純子（国立小児病院歯科）

桑原未代子（藤田学園保健衛生大学歯科）

幸地 省子（東北大学第二口腔外科）

：研究計画の概要：

1. 研究の目的

従来、乳幼児の歯科保健は、齲蝕の抑制を主な目標として、フッ素塗布と歯みがき指導を中心に進められてきているが、その効果は必ずしも十分にあがっているとはいえない。また、一般歯科臨床の場では、齲蝕の治療の終了後、定期健診による追跡が不十分で、早期発見、早期治療の実績が上らず、徒らに齲蝕有病者率、齲蝕率の上昇を招いていた面がある。そして、歯周疾患、不正咬合、その他については、ほとんど顧みられていない。

乳幼児歯科保健は、乳幼児期の食生活指導を基幹として、これに、健診・予防処置・治療を有機的に結びつけることによって、始めて本来の機能を果すことが可能であると考えられる。そこで本研究は、モデル地区を設定して総合的な歯科保健計画の試行を行い、これによって実用的かつ効果的な母子歯科保健管理体制の具体案を策定しようとするものである。

2. 研究計画

ここで試行する総合的な歯科保健計画は、調査、指導、予防処置、治療など、乳幼児に対しての歯科保健活動のためのすべての要素を含むものである。食生活指導を主体とする健康教育によって、歯周疾患、齲蝕、および咀嚼器官の発育の低下をどこまで改善できるかを検討するものであり、最終的な結論を得るためには10年を越える長期の追跡調査が必要である。モデル地区はすでに昭和59年度より、沖縄県平良市の狩保および池間地区に設定し、保健活動の試行を行っているが、今年度以降もこれを継続して行う予定である。

すでに報告した¹⁾ように、調査の内容は、4カ月毎に健診を行って口腔内環境の実態とその推移とを把握することの他、必要に応じて食物調査などを組み入れる。その目的は、ライフサイクルの中での歯科保健計画の立案整備のための基礎データを得ることにある。

指導は、母子複合体（母と子とを合わせた1つの単位）に対する健康教育の展開であり、主と

して食生活指導と医療受診行動への動機づけを行う。歯みがきはとくに取り上げていない。

予防および医療は、医療の導入、供給の方策とその必要量を推定するためのものである。予防処置としては、専らサホライド塗布を行い、フッ素塗布は行わない。また、治療は、アマルガム充填と抜歯を主体とし、歯髄処置は原則として行わない。

：本年度の重点的検討事項：

本研究の実施により、その継続期間に対応して、次の諸点の解明が期待される。

1. 歯周疾患に対する食生活指導の効果（短期成果）
2. 治療処置としてのサホライド塗布の効果（短期成果）
3. モデル地区活動の効果と効率の検討（短期成果）
4. 離乳過程の咀嚼行動の発達に対する影響（中期成果）
5. 乳幼児期の食生活指導の持続効果の測定（中期成果）
6. 乳幼児期の食生活指導の顎発育に対する影響（長期成果）

以上のうち、本年度は1～3について報告し、4～6に関してはひき続きデータの蓄積をはかる。なお、これらの他、本研究のための基礎資料として、また、母子健康手帳の改訂に関する研究班への協力²⁾を兼ねて行った乳歯萌出時期の調査方法の再検討に関しても報告する。

：本年度の研究経過と結果の要約：

本年度のモデル地区活動は、昭和61年6月、同10月、および昭和62年2月の3回にわたって実施した。以下、短期成果の総括を行うが、その詳細については次項以下に示す。

1. 歯肉炎を指標とした食生活指導の効果の測定

齲蝕は不可逆的に進行し、自然治癒は決して起らないが、歯周疾患、とくに歯肉炎の段階のものは、口腔内の汚れの状態によって敏感に反応し、従って、口腔内の状態が改善すれば自然治癒も起る。そこで当初は、歯肉炎の状態を指標として口腔内の汚れに対する食生活指導の効果について調べようとした。しかし、これはむしろ逆であるので、ここでは、食生活指導によって歯周組織の健康状態がどこまで改善できるかという形で評価することとした。詳細は後述する通りであるが、すでに有意の変化が確認されているので、口腔の健康に対する動機の誘発と、とくにその持続に成功すれば、食生活指導はきわめて有効な手段となると考えられる。

2. 治療処置としてのサホライド塗布の効果

C₁ あるいはC₂ 程度の齲蝕に対するサホライドの齲蝕進行抑制効果がきわめて優れていることは、すでに広く知られている。とくに乳前歯のように歯そのものが小さく、通常の充填処置を行えば歯髄への影響が避けられないような場合、唯一の信頼性のある処置とさえ考えられる。それにもかかわらず、サホライド塗布歯は未だ処置歯とは認められていない。このため、折角有効な処置を受けている歯も、敢えて無用の切削を加えて充填を行わない限り、永久に要治療の指示

を受け続けることになる。結果的に見れば、この優れた薬品は制度上否定されていることになる。本研究におけるモデル地区活動は、4カ月毎という比較的短い間隔で管理を行うものであり、サホライド塗布の効果のきめ細い追跡にはきわめて適しているので、後述するような解析を試み、少なくとも乳前歯群に対しては優れた有効性が確認できたので、サホライド塗布歯を“処置歯”に含めるか、または、“サホライド処置歯”として別項を立てることを提案する。

3. モデル地区活動の効果と効率の検討

最近、乳幼児における重症齲蝕の減少ということが指摘されている。しかし、これは単なる医療供給量の増加によるものであって、齲蝕の発生の低下とは何のかかわりもなく、また、歯科医師の急増した都市部における現象であって、歯科医師の少ない地方に及ぶものでもない。一般に僻地、離島などと呼ばれる地方では、現在でも僻地巡回診療の導入によってかろうじて医療的な対応を確保している実情である。しかし、現行の僻地巡回診療にも問題がないわけではなく、平均2年に1回という長い間隔のため、たとえすべての歯科疾患を完璧に治療し得たとしても、齲蝕の進行が早く、また、萌出と脱落によって集団の中で歯そのものが入れ変ってしまう乳歯では、次の巡回診療までに完全にもとの状態に戻る可能性が大きい。折角、大量のマンパワーと多額の経費を投入するのであるから、その効果と効率の向上についてはなお検討の余地があると思われる。ここでは、本研究におけるモデル地区活動の、4カ月に1回という間隔がどのような効果の蓄積を可能にするかという点と、このために必要なマンパワーと経費とを考慮した場合の効率とについて検討する。結果は後述する通り未だ中間報告の域を出ず、今後とも追跡調査を継続する必要があるが、効果の蓄積という点では期待できるものと考えられる。

4. 乳歯萌出時期の調査方法の再検討

乳幼児の保護者からの質問が比較的多いことの1つに、乳歯の萌出時期の問題がある。このことは、子どもの咬合の発達を重視し、食生活指導を通じて咀嚼器官の健全な育成を図ろうとする本研究にとって、きわめて好都合と考えられる。歯の萌出現象を手がかりとして咬合の発達や歯科疾患の予防に向って母親に対する動機づけを行うための1つの効果的な方法として、乳歯の萌出の進行を表すパーセントイル曲線を母子健康手帳に掲載することが考えられるからである。しかし、乳歯の萌出時期に関する従来の報告の多くが萌出後の乳歯のみを資料とするものであり、パーセントイルの算出ができないばかりでなく、方法論的に避けられない誤差をとまなうものである。今年度は、まず、乳歯の萌出時期算出のための方法論について検討した。

：考 察：

1. 地域の設定について

本研究における地域の設定は、次の3つの要件を考慮して行ったものである。

(1) いわゆる食生態の都市化が比較的遅れていること

例えば大都市におけるように、食生態の都市化が高度に進行している状態では、住民の食生活がかなり均一化している可能性があり、食生活に関しても、歯科疾患についても、データの分散が小さく、これらの現象の相互関係の解析に際して不利と考えられる。

(2) 地域圏がはっきり区画されていて比較的閉鎖的であること

ここでいう比較的閉鎖的であるということは、婚姻などによる人の出入などは別として、住民の転入、転出が少ないこと、小売店を対象とする食品等の流通はあっても、個々の住民が、日常、自由に地区外に出て食品を購入するのは不便であること、および医療の供給を受けることも不可能ではないが、かなり大変であることなどを指すものである。このような条件は、対象児を長期にわたって把握するため、地区内で消費される食品の質と量を知るため、および、医療供給の効果を正確に測定するために必要である。

(3) 住民および関連機関の協力が期待できること

とくに説明を加えるまでもなく、この点は、保健活動などの実施に不可欠の要件である。

以上のような条件で地域を選ぶと、必然的に遠隔地にならざるを得ないが、本研究における地域の設定は、多項目についての検討が同時にできること、過去数年間にわたって乳幼児歯科健診を行い、十分な協力態勢を得る準備ができていたことなどのため、経費の増大という不利益を考慮してもなお成功であったと考えられる。

2. 初年度の研究成果と今後の方針

本年度は、とくに、食生活指導の効果が歯肉炎の実態との関連によって証明できたこと、サホライド塗布の効果が確認できたこと、および、僻地医療の効率向上の手がかりを得たことなど、貴重な成果が上がったと考えられる。また、来年度以降は、主として食生活指導と齲蝕の関係、離乳過程と咀嚼行動の発達、および、食生活指導の持続効果などの検討に進みたいと考えている。

：結 論：

1. 食生活指導のみによって歯肉炎の重症度の低下が見られた。
2. サホライド塗布は、乳前歯の齲蝕に対して有効な処置手段であることが確認された。
3. 治療の間隔を短縮することによって、治療効果の蓄積の可能性があるように思われた。

：文 献：

- 1) 井上直彦ほか：乳幼児歯科保健に関する研究。昭和60年度母子保健システムの充実・改善に関する研究報告書、1985。
- 2) 幸地省子ほか：母子健康手帳の改訂試案。昭和60年度母子保健システムの充実・改善に関する研究報告書、1985。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究の目的

従来、乳幼児の歯科保健は、齲蝕の抑制を主な目標として、フッ素塗布と歯みがき指導を中心に進められてきているが、その効果は必ずしも十分にあげられているとはいえない。また、一般歯科臨床の場では、齲蝕の治療の終了後、定期健診による追跡が不十分で、早期発見、早期治療の実績が上らず、徒らに齲蝕有病者率、齲蝕率の上昇を招いていた面がある。そして、歯周疾患、不正咬合、その他については、ほとんど顧みられていない。

乳幼児歯科保健は、乳幼児期の食生活指導を基幹として、これに、健診・予防処置・治療を有機的に結びつけることによって、始めて本来の機能を果たすことが可能であると考えられる。そこで本研究は、モデル地区を設定して総合的な歯科保健計画の試行を行い、これによって実用的かつ効果的な母子歯科保健管理体制の具体案を策定しようとするものである。